

の指摘にあるように、土器・陶磁器間での機能的、価値・価格的補完関係が影響しているといえる（小野1997）。機能的補完関係の面では、宴席用の土器皿、喫茶用の中国・瀬戸美濃天目茶碗、象嵌青磁椀と、通常の食事に使う瀬戸美濃平椀・小皿類、青磁・白磁椀皿類との関係、また貯蔵用の珠洲壺甕類と茶の販売用の信楽壺・甕との関係など、時と場に応じた目的別の使い分けがみられた。価値・価格的補完関係については、食膳具では貿易陶磁と瀬戸美濃はおおよそ拮抗しており、貯蔵具・その他では瀬戸美濃の比率の方が圧倒的に多いことから、貿易陶磁の価格と流通量に応じた瀬戸美濃の代用品としての使用が想定できた。

また今回の調査区における珠洲・瀬戸美濃製品の器種および時期ごとの変遷は、各生産地の状況に極めて似通っているといえ、この現象は、これらの製品が生産地から当地にそのままもたらされた結果であると推察する。しかし本調査区の瀬戸美濃天目茶碗は生産地に比べ高い比率を示しており、珠洲V期に減産する壺・甕の比率が本調査区ではIV期よりも増加するなどの違いがみられた。

また出土量のピークは、珠洲ではV期に、瀬戸美濃では古瀬戸後II期にあり、出土量と遺跡の盛衰が比例するのであれば、第86・87次調査区における最盛期は14世紀後葉から15世紀初頭に求めることができる。廃絶期については、本調査区と普正寺遺跡における瀬戸美濃の時期別出土量を比較した結果、本調査区は普正寺遺跡が飛砂活動によって廃絶した1441年前後よりも、やや早い段階に終焉を迎えたと推察する。この結果は古瀬戸後IV（新）期以降の製品や、大窯第4段階前葉以前の大窯製品、明末期以前の青花が皆無であることからも類推できる。

以上、第86・87次調査区における出土土器・陶磁器の考察を行なった。しかし生産地との比較を試みたものの、ほぼ遺跡内での考察に終わってしまった。また補完関係についても、本調査区が存続した期間全体で検証したにすぎず、短い時間内にそれぞれがどのように存在し合い、どのように変化していくのか、その変化の要因が何であるのかについて踏み込むことができなかった。 （貫井美鈴）

(註)分類名は工藤清泰氏（工藤1999）に準拠した。

（2）十三湊遺跡第86・87次調査区出土遺物の分布—地理情報システム(GIS)の活用—

（a）方 法

十三湊遺跡第86・87次調査は、十三小学校のグラウンド内の約3080m²を対象に実施した。その結果、土器・陶磁器をはじめとして、10,000点を越す遺物が出土した。これまで、富山大学考古学研究室の調査では、すべての出土遺物の空間分布状況を色々な方法で記録し、分析に生かしてきた。今回の調査では平板を使用し、遺物出土地点平面図を作成し、標高値を記録した。しかし、第86・87次調査区は非常に広く、出土遺物も大量であるため、地理情報システム（Geographic Information System以下、GISと略記）を用いて図化と分析を行なうこととした。

本来、GISは地理学の分野で使用されてきたシステムである。考古学の分野では、新納泉氏が簡易地理情報ソフトIDRISIを用い、岡山県定北古墳の玄室床面に用いる石材の最短入手ルートを想定した論考などがある（新納 他1995）。拙稿ではGISソフトの一つであるARC/INFOを用いて、富山県黒川上山古墓群の造墓過程、墓地の構造を復原した（戸簾1998）。これは、地形と墳墓の平面図を重ね合わせ、鳥瞰図を作成し、平面図からはわかりにくい墓地の景観を復原したものである。次に、各墳墓の重心からThies-

sen多角形を発生し、多角形の領域面積と墳墓の面積、土量から墳丘規模が次第に縮小する過程を捉え、墓地の構造を明らかにした。さらに造墓方法、造骨器や土器の年代観、埋葬方法から造墓年代が不明の墳墓について年代を類推し、造墓過程の復原を行った。

GISは学際的なシステムであるが、考古学においても遺跡・遺構・遺物の空間情報や属性情報を蓄積することで、研究目的に応じ、高度な分析を容易に行なうことができる点で非常に有用である。また先に示した、新納氏の論考や拙稿から、考古学情報について数値的な裏付けを与えることが可能であり、墳墓群が持つ空間関係や遺跡群と地域の地形との関わりのようなレベルで論じることも可能である。さらに、GISはデータを簡単に更新することができることも特徴であり、workstationという作業環境下にあるため、LANで研究室同士を結ぶことができる。この場合、ARC/INFOは外部からの書き換えが不可能のデータベースとして大学や研究機関が管理し、端末はIDRISIなどを用いて、研究者や個人が利用することになるであろう。端末機としては、汎用コンピューター、ミニコンピューター、パーソナルコンピューターなどの幅広い利用が可能である。

なお本稿では、UNIX workstation内で稼働する次のソフトウェアを使用した。OSはSUN社製solaris ver.1.0.2を、GISソフトはESRI社製ARC/INFOver.7.2.1をそれぞれ利用した。成果図の出力はHewlett-Packard社製、DesignJet 750cを用いて行った。

本稿では、遺物を種類と用途ごとに分類し、第86・87次調査区内において、どのような分布を示すのかを捉らえることを目標とした。GISは地形、地質、水系のような地理情報と、分析しようとする対象物とを組合せて分析することができる。しかし、十三湊遺跡は砂州上の極めて平坦な遺跡であり、地形の起伏は小さい。そこで、第86・87次調査区の遺構の全体平面図を地理情報として考え、堀と溝の区画遺構と遺物の種類との関係を分析することで、遺跡の中での各区画の性格について考えた。なお、ここでいう対象物は出土遺物のことである。遺物については出土地点をデジタイザによって取込んだ。遺物のX-Y座標値は、デジタイザ上の座標値を、国土座標である平面直角座標系に変換する作業を行なうことで与えた。また、国土座標に変換することで、異なるテーマの図面を重ね合わせができる。本稿では、平面直角座標として、北緯40°00'00"東経140°50'00"を原点とする第X座標系を使用した。次に、出力した遺物地点図と、調査区全体平面図とを重ね合わせ、成果図とした。

以下に示す種類・用途を遺物毎に入力した。^註

①種類 出土した遺物の種類として、次の14種類がある。

- 1 貿易陶磁 2 濑戸美濃 3 珠洲 4 瓷器系 5 中世土器 6 瓦器 7 鉄製品
8 銅製品 9 古銭 10 石製品 11 土製品 12 木製品 13 自然遺物 14 その他

②用途 出土遺物の用途としては、次の14種類を挙げた。

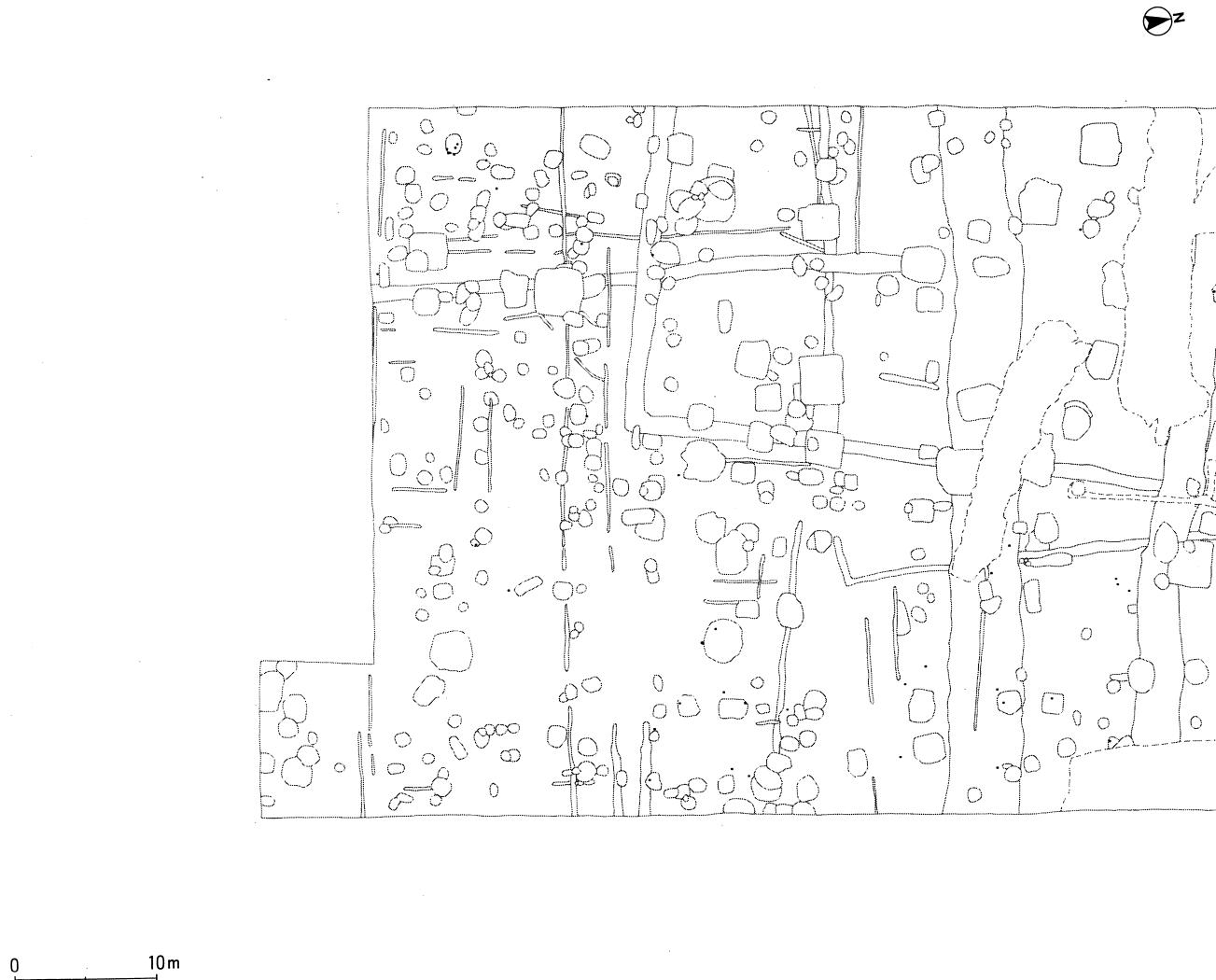
- 1 食膳具 2 調理具 3 貯蔵具 4 茶道具 5 調度品 6 武具 7 工具(釘, くさび, 鐛)
8 文房具 9 漁具 10 仏具 11 暖房具 12 装飾品 13 工業廃棄物 14 その他

この内、装飾品は主として装身具のことであり、工業廃棄物は鉄滓や銅滓のような金属手工業起源の遺物である。

(戸簾暢宏)

(b) 出土遺物の分布（第22～26図）

ここでは、出土遺物の分布を主として用途別にみると、遺跡内の格差にもとづく空間の違いについて考えてみる。格の高い遺物と考えられる土器・銅製品・茶道具・調度品・文房具・仏具・装



第22図 土器分布図

z



第23図 銅製品分布図



第24図 茶道具分布図

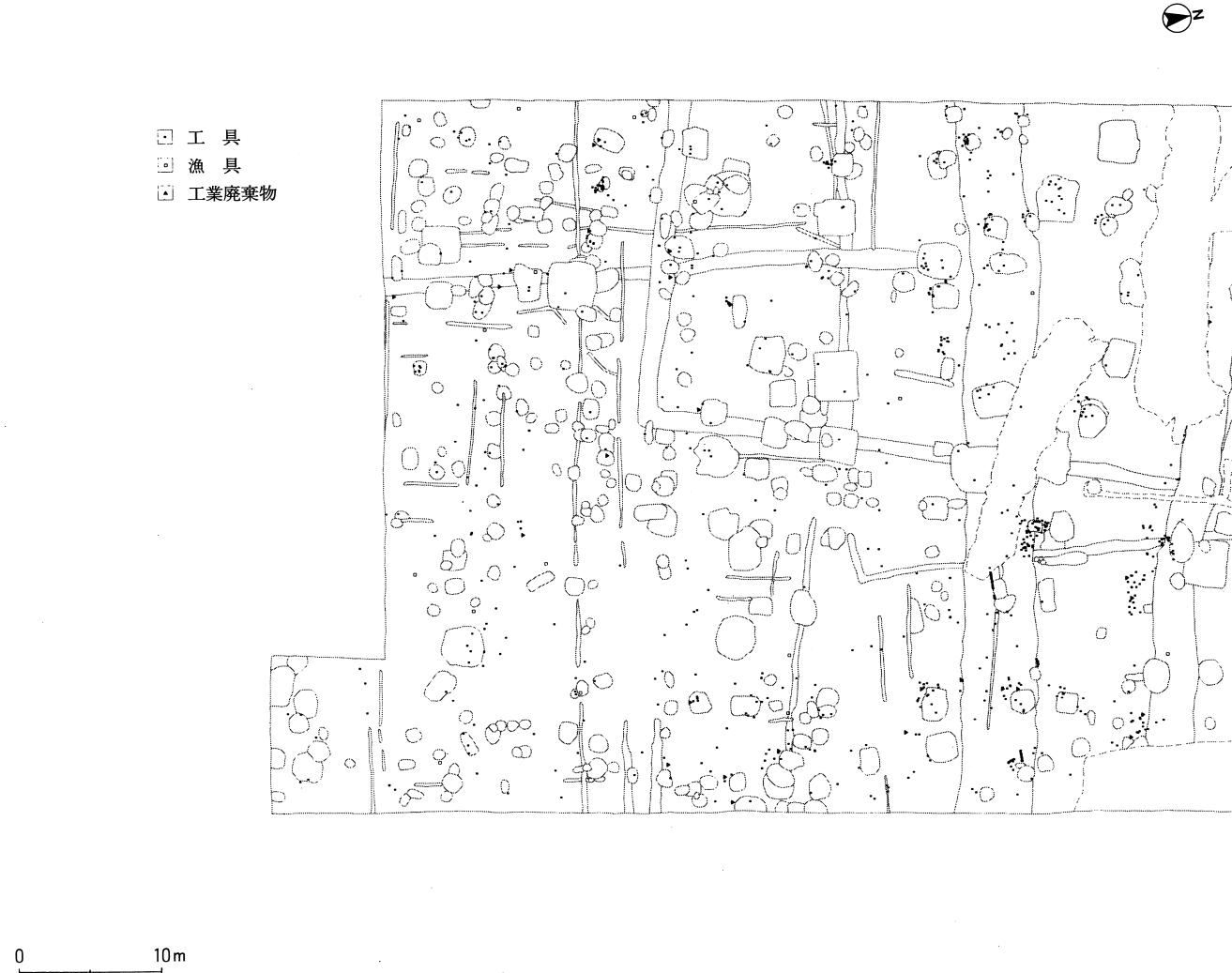
N

- 調度品
- ★ 文房具
- 仏具
- 装飾品



0 10m

第25図 用途別出土遺物分布図(1)



第26図 用途別出土遺物分布図(2)

飾品はSD02以北に集中し、職能民の生業に関係すると考えられる工具・漁具・工業廃棄物はSD02以南に集中する傾向が見られるのではないかと予測したが、格の高い遺物に関しては空間の分布に大きな差異はみられず、工具に関しては予想された結果とは逆にSD02以北に集中する傾向が見られた。工具がSD02以北に集中した原因に関しては今回作成した分布図が時期ごとではないことを考慮すると、SD02廃絶後に竪穴建物が多く作られるようになる時期の遺物を多く含むためと考えられる。

(c) 遺物の接合状況（第27～32図）

第86・87次調査区において出土した中世の土器・陶磁器類総数3946点のうち、接合を確認できた資料は240例であった。遺物ごとの傾向を読み取るために遺物の種類ごとに図版の作成を行ったが、各遺物の種類ごとで異なる傾向はみられなかった。これらの接合資料は調査区内に広く分布しており、同一遺構内での接合にとどまるものから、40m以上はなれたところにある別の遺構のものと接合したものまで存在する。同一遺構内での接合にとどまる資料が少ないため、遺物は二次的に移動していると考えられ、本来それが使用されていた地点で出土したと認識することは難しい。しかしSD02によって区画された、北側の領主館と推定される範囲と南側の家臣団屋敷と推定される範囲の遺物が接合した資料は少なく、それらの資料もSD02廃絶後の時期にあたることから、SD02が利用されていた時期には堀の北側と南側で陶磁器使用の場が明確に分けられていたと考えられる。

今回の調査区では出土遺物の分布状況から遺跡内の格差にもとづく空間の違いはみられなかっただが、接合状況から、堀を境界とする陶磁器使用の場の違いがあったことがわかった。また遺物の移動状況に関しては江馬氏館や一乗谷朝倉氏遺跡といった城館跡によく見られるような現象(小野1991、中田1997)を十三湊遺跡の領主館周辺である今回の第86・87次調査区においても示唆できるであろう。(渡辺 樹)

(d) 小 結

GISに関しては、今回は膨大な数の出土遺物を整理し、遺跡全体の中での遺構とのかかわりを考えるため、実験的に利用した。その成果として、分布図作成に格段の効率化を図れたこと、堀を境界として陶磁器使用の場が明確に分かれることを示すことができた。これらの成果から、地形と遺構とのかかわりの中でしか論じざるを得なかった、地理学寄りの分析手法から出土遺物と遺構という、より考古学的な視点からの分析を可能とするに至ったといえよう。汎用的な利用には解決すべき問題が残るが、今後も考古学に積極的に応用し、利用の幅を広げて行きたいと考えている。

(戸簾暢宏)

(註)出土遺物の属性分類は、宇野隆夫氏による食器の使用法の復原(宇野1997b)を参考に戸簾と渡辺が行った。

(付記)本稿の作成にあたり、富山大学人文学部講師内山純蔵氏にご指導を頂いたことを記して謝意を表したい。

(3) 錢 貨

(a) はじめに

出土銭貨は一括出土銭の時期比定が行われ(鈴木1999、永井編1994・1996)、六道銭から経済的側面、あるいは銭貨自体の意味や一括出土銭の性格についても活発な研究が行われている(網野1994、橋口1993・1997・1999)。

だが出土銭貨の中には、調査区内から散発的に出土し、一般的には良好な資料とは言いがたいものが